■ 4条1項11号

不服 2025-002248

＜本願商標＞

ベジタブル習慣

第29類「菓子（肉・魚・果物・野菜・豆類又はナッツを主原料とするものに限る。）、食用油脂、乳製品、食肉、卵、食用魚介類（生きているものを除く。）、冷凍野菜、冷凍果実、肉製品、加工水産物、加工野菜及び加工果実、油揚げ、凍り豆腐、こんにゃく、豆乳、豆腐、納豆、加工卵、肉製品・加工水産物又は加工野菜等の具材と調味料を含み、肉、野菜、きのこ類、豆腐、厚揚げ又は魚介類を使用して作る即席惣菜のもと、麻婆豆腐のもと、カレー・シチュー又はスープのもと、お茶漬けのり、ふりかけ、なめ物、豆、野菜を主材とする惣菜、きのこを主材とする惣菜、豆を主材とする惣菜、肉製品を主材とする惣菜、海藻類を主材とする惣菜、加工水産物を主材とする惣菜、ナッツを主原料とするスナック食品、豆を主原料とするスナック食品、果実を主原料とするスナック食品、野菜を主原料とするスナック食品、豆腐を主材とする惣菜、おからを主材とする惣菜、乳製品を主材とする惣菜、加工卵を主材とする惣菜」及び第30類

＜結論＞

原査定を取り消す。

本願商標は、登録すべきものとする。

＜原査定理由＞

引用商標：「野菜習慣」（標準文字）

第29類「加工野菜及び加工果実、カレー・シチュー又はスープのもと」
及び第30類、第32類

＜理由＞

※読みやすくなるように、以下、当事務所にて下線や改行等を挿入しております。

（1）本願商標について

本願商標は、・・・、「ベジタブル習慣」の文字を一行に横書きしてなるものであり、これは一般的な辞書等に掲載されている語ではない。

また、「ベジタブル習慣」の文字は、「野菜。」（出典：「広辞苑 第七版」株式会社岩波書店）を意味する「ベジタブル」の語と「習慣」の語とを結合してなるものと、容易に理

解できるものであり、全体として「野菜の習慣」ほどの意味合いを想起させ得るものといえるが、その意味合いは漠然としており、そのほかに「ベジタブル習慣」の文字が特定の意味合いを認識させるものとして一般に使用、理解されているというべき事情も見当たらないことからすると、同文字は特定の意味を有しない一種の造語として認識されるというのが相当である。

そうすると、本願商標よりは、その構成文字に相応した「ベジタブルシュウカン」の称呼が生じ、また、特段の観念は生じない。

(2) 引用商標について

引用商標は、「野菜習慣」の文字を標準文字で表してなるものであり、これは一般的な辞書等に掲載されている語ではない。

また、「野菜習慣」の文字は、「野菜」の語と「習慣」の語とを結合してなるものと、容易に理解できるものであり、全体として「野菜の習慣」ほどの意味合いを想起させ得るものといえるが、その意味合いは漠然としており、そのほかに「野菜習慣」の文字が特定の意味合いを認識させるものとして一般に使用、理解されているというべき事情も見当たらないことからすると、同文字は特定の意味を有しない一種の造語として認識されるというのが相当である。

そうすると、引用商標よりは、その構成文字に相応した「ヤサイシュウカン」の称呼が生じ、また、特段の観念は生じない。

(3) 本願商標と引用商標の類否について

本願商標と引用商標を比較するに、外観においては、「習慣」の文字を共通にするものの「ベジタブル」の文字と「野菜」の文字で相違し、書体や全体の文字数も異なるものであるから、それぞれ別異の語を表しているものと容易に理解でき、明確に区別できるものである。

そして、称呼においては、本願商標より生じる「ベジタブルシュウカン」と、引用商標より生じる「ヤサイシュウカン」とでは、「シュウカン」の音を共通にするものの、「ベジタブル」の音と「ヤサイ」の音で相違し、全体の音数も異なるものであるから、語調、語感が明らかに異なり、明瞭に聴別できるものである。

また、観念においては、いずれも特定の観念は生じないため比較することができない。

してみれば、本願商標と引用商標とは、観念においては比較することができないものの、外観において明確に区別できるものであり、称呼において明瞭に聴別できるものであるから、両商標が与える印象、記憶等を総合してみれば、商品の出所について誤認混同を生じるおそれのない、非類似の商標というのが相当である。

(4) まとめ

以上のとおり、本願商標は、引用商標とは非類似の商標であるから、両商標の指定商品の類否について判断するまでもなく、本願商標は、商標法第4条第1項第11号に該当しないものである。

したがって、本願商標が、商標法第4条第1項第11号に該当するとして本願を拒絶した原査定は、取消しを免れない。

その他、本願について拒絶の理由を発見しない。

よって、結論のとおり審決する。

弁理士コメント

本願商標「**ベジタブル習慣**」と引用商標「**野菜習慣**」は、観念においては比較することができないものの、外観において明確に区別できるものであり、称呼において明瞭に聴別できるものであるから、両商標が与える印象、記憶等を総合してみれば、商品の出所について誤認混同を生じるおそれのない、非類似の商標というのが相当である、と判断されました。

本事件は、「観念」の同一性が主な争点となった、珍しいタイプの審決であると言えます。原審査においては、本願商標「ベジタブル習慣」と引用商標「野菜習慣」からはともに「野菜の習慣」あるいは「野菜を取る習慣」の観念が生じ、これらが同一であることを根拠として、両商標が類似すると判断されました。

一方で、審決では、両商標からはたしかに「野菜の習慣」ほどの意味合いを想起させ得るものではあるが、その意味合いは漠然としており、そのほかに「ベジタブル習慣」や「野菜習慣」の文字が特定の意味合いを認識させるものとして一般に使用、理解されているというべき事情も見当たらないことから、これらは特定の意味を有しない一種の造語として認識されるというのが相当であると認定されました。その結果、両商標からは、いずれも特定の観念は生じず、これらは非類似の商標であると判断されております。

審決にある『「野菜の習慣」ほどの意味合いを想起させ得るものといえるが、その意味合いは漠然としており』というのが、わかるようでよくわからない気がしますが、「野菜を取る（食べる）習慣」以外にも、たとえば、「野菜を栽培する習慣」、「野菜を食材にする習慣」、「野菜のことを考える習慣」などといった意味合いも考えられるから、必ずしも一義的な意

味合いは生じないということでしょうか。

我々商標の実務家であっても、「観念」の同一性によって商標が類似と判断される事例には普段まず遭遇しないため検討を忘れがちではありますが、本事件のような例があることを踏まえると、本願商標「ベジタブル習慣」のような商標の商標調査を実施する際には、同一観念が生じ得る語についても、想像力を働かせて念入りにチェックをすることが必要だと実感させられる次第です。

なお、本審決において、引用商標は「野菜習慣」と表記されておりますが、正確には「野 菜 習 慣」と、各文字の間に1文字分のスペースを有する標準文字となっております。なぜ、このような態様となっているのかは疑問です。

(弁理士 永露 祥生)
< 2 0 2 5 年 7 月 2 1 日 >